不透明な酪農情勢
――その展望と対応を探る――

㈳北海道酪農協会
専務理事　小林道彦

1　昨年からあまりにも思いがけない大変革が地球の上を稲妻のごとく走り抜けているためか，平成3年の酪農界の展望というテーマを与えられても正直にいえば苦しむどころか，おじけがついてしまう。今までは1年ぐらい先までのことはおおよそ見当もついて，それにどう対応していったらよいかということは何とか予見することができた。そして，それほど見当はずれをしたこともないが，今年は〝何が起きるか分からない〟という気持が先に立って，極めて自信が持てない心境にあることを前もって正直に告白しておかなくてはならない。

だから，賢明な人であれば，お断りすることが良心的なことだと思う。だからといって，全く分からないといって逃げるのも無責任かなと思い迷いながらも，蛮勇を振るって今年の酪農界の展望を試みることにした。だから，あまり当てにはならないかもしれないし，かえって世を惑わすことになるかもしれないが，酪農の経営と生活を進めていく上にはどうしても1つの展望を持って対応していかなくてはならないので，皆んなで展望と対策を検討するための〝たたき台〟ぐらいになるかもしれないとの思いから，不十分なことを承知でこのテーマに挑んでみることにした。

2　展望と対応を考えるに当たっては，まず，現在，酪農界に何が起きているかということを明と暗の二面から点検した上で，将来へのビジョンとそこに至るまでのシナリオをしっかり持つことが必要欠くべからざることである。

そこでまず，現在起きている問題と実態を簡単に列記することから始めたい。

問題の**第1**は，何といっても自由化の問題がどう結着するかである。ガットのウルグアイラウンドや日米2国間交渉で乳製品がどんな扱いを受けることになるかである。このことは今，我が国の酪農乳業にとって最重要問題である。今(12月10日）の段階では交渉は中断しているので，その結果と影響を的確に判断できる材料がないので何とも言えないが，私はどんなような結果になっても，このことが将来を別にして，今年，直ちに我が国の酪農界を直撃して大混乱を引き起こすようなことにはならないと判断している。もちろん楽観しているわけではない。それに必要な外交，国境，国内対策を強力に進めることによって，少なくとも今年への直撃は避けることができると確信しているからだ。ここで，へこたれたり，あきらめてはいけないことを，まず強調しておきたい。策はいろいろあるからだ。

第2の問題として私が重視しているのは，今，日本は人手不足で好条件で若い労働者をかき集めている。そのため，若者やまだ比較的転職のきく年齢層の中堅酪農家が一時のお金の魅力にひかれて，酪農を志すことをあきらめたり，酪農から離れていく傾向があることである。今こそ，余程〝現役の酪農家が自信と勇気に燃えて，若者に夢と希望をもたらす〟ような酪農環境や未来を約束し実践するのでなければ，酪農は外圧ではなくて担い手不足という内圧によって衰退し崩壊してしまい，成長・発展どころではなくなってしまうのではないかと憂えながら，その対策をしているところである。ヘルパー事業もその中の1つである。これは超重要事項だと思っている。

第3は当面している廃牛，ヌレ子などの乳肉用

個体の暴落である。

一時は，この暴落で酪農家の悲鳴が聞こえてきた。あまり良かった時と比較することは適当ではないとは思うが，酪農家が牛肉で生活できたという変則的な時代の直後であっただけに，乳価の引き下げと物価の上昇と抑制的な計画生産が乳肉の自由化交渉と重なって，酪農家に不安が広がり，意欲の低下となっていることを見逃すことができない。この結果，平成2年の酪農経営は100 t 生乳生産に対して，前年対比約100万円の減収となって，これが，そのまま所得の減収となってしまっている。ただ，前年は最高の年であったので，例外としても，それを平年時に引き下げて比較しても，この金額の半分は完全に減収となってしまって年を越していることである。借金を返せなくなっている酪農家はもちろん多い。つらい年となった。

第4には，年の初めには生乳の抑制生産を指導したのに，いくらお天気さまのせいとはいえ，牛乳が売れて，乳牛がへたばって乳が出なくなり，急に生乳が不足してバターの緊急輸入をしなくてはならないことになったり，いくら生乳の増産を指導しても，急には乳量も成分も増えないということを体験した。乳牛は機械ではないのである。だから，計画生産にも，需給計画にも，備蓄を含めた余裕やゆとりのある需給計画を立てなくてはならないことを，またしても強烈に学んだのであった。また，生乳が不足しているのに飲用市場の乱売が続いて，結果的には飲用向乳価も引き下げとなって経営と生活を圧迫した。これは一体どうしたことか。生産者，乳業者，販売者とも牛乳の加工流通，市場意争のあり方をもう一度厳しく反省する必要がある。

以上，主な暗い問題だけを並べたが，酪農界には明るい材料がないわけではない。

詳述する紙面はないので，列記してみると，

①牛乳，乳製品，牛肉は依然として消費が伸びている成長産業であることだ。主にお天気のお陰だとはいっても，生乳は不足し，乳肉とも増産が期待されていることである。他にこんな作目はない。それに，②酪農の生産基盤と規模は確立し，乳牛改良も世界のトップクラスのレベルに引き上げられているし，借金はまだ多いが，コストも乳価も欧米に比較すると内外価格差は縮小して，せいぜい1.2倍くらいの優等生となっていて，国際競争力を着実に身につけている。それに，③食糧の質と量の安全保障と自然環境を守り地球を守れという運動は，今や世界の与論となり，政治問題化して，農業，農村の役割の大切さを人類も国民も遂次理解し始めている。また，食糧や石油はまさに武器そのものであることもイラク問題をきっかけにして，人類も国民もようやく分かりかけている。工業と農業，経済と非経済のバランスを真剣に考えないと国も地球も亡びてしまうことを皆んなで考え直し始めている。

農業・酪農は今はまだ軽視されているが，将来は人類が存在する限り，人の命をかけて，その役割の重要性を再び見直す時が近く来るに違いないと私は確信している。

3　以上，今，起きている酪農界を巡る明暗の現象や事件を総合して，今年の酪農界を展望してみると，結論的に言えば，前年の〝乱の年〟を経て，今年はなお〝不透明な年〟〝無気味な年〟ということが言えるかもしれない。〝迷いの年〟といってもよいかもしれない。だが，私はそんなに深刻な暗い年にはならないと思っている。乱のあとは治である。ここで，その理由を申し上げてみたい。

まず，**第1**には牛乳・乳製品の需給事情からいえば，少なくとも今年の前半は生乳不足であって，需給計画，計画生産からみても，全国では1.5%，北海道では3%を超える生乳増産型になることは間違いないと予測している。

それでも下手をすると，それくらい生産しても天気次第だが，さらに緊急輸入なんてのことになるかもしれないと思うくらいである。ただ，やっぱり，このごろの気象の異常は大いに気になる。用心，用心である。天が消費にも生産にも味方してくれることを祈りたいところだ。

それに大事なことは，保証乳価は今のところ，だれが計算しても，諸データーからみて，値上げこそすれ，値下げすることにはならない。また，限度数量も増えこそすれ，減ることはないはずである。

だから，〝乳価×乳量〟で，今年は肉ではなく，

生乳で稼げる年になると思っている。

内外価格差の縮小は既に過去5か年間で十分にその責任を我が国の酪農家は果たしている。このことは，国民が理解してくれていて，政策に協力してくれると私は確信している。だから，今年はつまり，値上げと市場正常化，生乳増産の年であると思っている。どうだろうか。

第2には，牛肉の自由化は4月から本格化するが，不足払い法もあり，70%の関税もあり，輸入品と国産品との市場における品質の動きなどからみても，制度に加入していれば，ヌレ子の価格が7～8万を維持することは間違いないと予想している。そして，輸入品とまともにぶつかる廃牛についても，できれば何とか技術をみがいて，最低10万円程度の価格を保つことができるのではないかと思う。工夫のしどころだ。

乳用向個体価格は乳価，乳量の上昇気流にのって底を脱し，堅調に推移して，北海道で平均40万円の声が聞かれるのではないかと思っている。心配は廃牛だけだ。

第3は，購入飼料（配合）の価格は親子基金や円高，世界の作況と輸送費いかんにもよるが，下がり気味で安定して推移するのではないかと思う。

自給飼料作物については，このところ異常な気象なので天候いかんにもよるが，技術の向上と自助努力で比較的良い作物を豊富に生産し調製保存しているので，今年も用心深くやれば，失敗はないと思い，それを願っている。

第4には政治の動きである。あまり期待はできないが，少なくとも外交交渉においても，国境，国内対策についても，今年，直ちに酪農界を崩壊の危局に陥れるような愚かなことはしないと私は信頼している。ソ連にみるごとく，食糧危機は人類にとって，いずれ近く，イラク問題，環境問題以上の政治問題となってくるに違いないと思う。

こうして，ざっと展望してみると，人類は地球と食糧の安全を保障する意識にやっと目覚め始めてきている。

政治や経済や気象には，なお大きな変革が続くかもしれないし，内外ともに何がどこでどんな形で起きるか分からない年が続くかもしれないが，酪農・乳業界は，その政治・経済の変革の割合には比較的安定した増益の年にすることは努力次第では可能であるという気がしている。甘いかもしれないが，私はこんな展望に立っている。

たしかに，油断は大敵であるし，用心深く進む年ではあるが，一挙に危機に直面するようなことは絶対にないと思う。何とかして，〝治の年〟〝正常化の年〟にしたいと思っている。決して希望的観測ではない。やることをきちっとやればできると思っている。

4　そこで，では我が国の酪農・乳業はこの国際化，自由化の嵐が吹き荒れる中で，また，政治，経済，社会，気象が急速に大変革を進めている中で，長い目で見て何をビジョンとしていくべきなのかをシナリオとともにちょっと考えてみたい。そうでないと対応の方向を誤るからである。

私は大きく分けると2つのビジョンを持っているが，その第1のビジョンは何10年かけても達成したいと考えている。ここでは，第2のビジョンとシナリオは省くことにする。

それは，我が国で生産される生乳の80%を飲用向け（含，生クリーム）として消費する市場を主として国内に形成することである。

年率2%増でいくと約24年はかかる。もちろん，季節的などによる需給のギャップがあるので，この場合でも乳製品に1部（20%）を加工しなくてはならないが，その加工順序は日本人向けに高くても売れるナチュラルチーズとし，その次に粉乳，バターなどとすることである。やってやれないビジョンではないように思っている。

そのための技術，施設，流通と拡売を開発すればよい。そのとき，ルールなき南北牛乳戦争もなくなるし，自由化への恐れもなくなる。そのかわり，自由化されたに等しい内外の産地間競争（戦争ではない）に勝つための高品質や低コストの自助努力が求められる。

しかし，プール乳価水準は仮にどんなに下がったとしても，将来，府県ではキロ90円，北海道でもキロ70円を下がることはなくなる。その時，府県の生乳生産のコストはキロ70円台，北海道では50円台まで引き下げて，家族労賃は1時間2,000円として，1家2.5人で1人年2,200時間稼動す

れば所得は約年1,000万円とし，借金を返しても月50万円の生活ができて，なお多少は貯金や旅行などをすることもできるし，ヘルパーも雇えるということにしたいのである。

もちろん，生産材の引き下げや集送乳も，C・Sも，乳業工場も，流通も徹底したコストの引き下げ策を講じてもらわなくてはならない。

必要な乳製品は輸入することにすれば，国際的にも問題は起きない。それでいて，我が国の生乳の計画生産は年平均1.5%程度の増産型(北海道は3%）とし，労働を楽にするためと生乳の品質を良くするための新しい施設・機械の大改造を負債の重圧を避けながらやり遂げなくてはならない。それに必要な政策・技術を確立することだ。そこに〝強い経営と楽しい生活〟が出来上がる。そして，その結果として，〝質的に世界一の酪農理想郷〟が創設される。

人類が理想とする生産と生活のユートピアが完成する。

もちろん，乳肉向けの個体販売もする。それがボーナスである。

堆きゅう肥をつくって，土づくり，草づくりに努め，乳牛改良と記帳による経営管理の達人にもなる。好きな道楽もやるが，〝忙しいが楽しい毎日だ〟といえるような酪農人生，酪農家庭の生活を創り出す。このために必要なのは，何としても有能な若い人材が酪農に定着することだ。それに必要な物心労ともに魅力ある酪農環境を今，つくり上げることだ。どうだろう，一緒にやりぬかないか！

5　とは言っても，現実にある諸問題とこの将来ビジョンとの間には相当の距離と障害がある。だが，今までの実績を考えると官民，産官学の協力を得て，やる気になればできないことはないと思っている。

乳肉の市場は我が国は依然として世界一の成長市場だし，それに乳肉の不足している近い国々に輸出することだって，やればできると思っている。ただ，それには，それに必要なシナリオを作って，そのための段どりを進めなくてはならない。現実に則して理想を忘れずに成し遂げるために，創意工夫を重ねて，その2つを結びつけることである。ただ，ビジョン，シナリオはこれ1つしかないわけではない。いろいろあると思う。これら辺のことについては英知を集めることだ。それにはロマンにチャレンジする不屈の情熱，酪農狂(きち)と呼ばれる集団が必要なのである。そして，一見，不可能と思われる夢でもよい。それを求めて，その夢を実現するために生きる情熱の士よ，立ち上がってくれと呼び掛けたい。

6　そこで対応ということになる。これからの時代，自由化問題がどのように決められようとも，長い目で見ると，つまるところは国際競争にも国内競争にも負けないで生産品を売りぬくためには，〝強い酪農経営と魅力ある楽しい生活〟をつくり上げること以外に生き残る道はない。

そして，そのためのポイントとしては，

①低コスト，②高品質，③高所得，④休日の持てる酪農，⑤美しい牧場，⑥楽しい酪農生活の6つの条件を具備することに努めなくてはならない。相反する要素が，この6つの中には同居している。〝言うは易く，行うは難し〟である。この6条件・6つのハードルを越えることは難しいことである。余程の有能な人材がかなりの精進をしなければ乗り越えることができない。人材が必要である。

ではあるが，日本の酪農はこれ以上の難しいハードルを世界一の新記録の速度で乗り越えてきている。官民，産官学の協力を得て，酪農家はどっこい生き残り勝ち残ってきている。協力し努力すれば，乗り越えられないハードルではない。その困難を乗り越えるところに生き甲斐も知恵も生まれてくる。

もちろん，平凡なことだが，自助努力による自給飼料のコスト・量と質の向上，乳牛改良と産乳量の増大，乳質の向上，疾病の防止，個体の有利販売，機械施設の有効活用，生産材の上手な買い方，金の借り方使い方や経営管理能力の向上，環境の美化整理，楽しい生活の創造などに努めなくてはならない。

また，外に向っても力を合わせて，ガットの新貿易ルールの決定，生産材の引き下げ，適正な乳肉価格の決定と数量の割当，加工・流通コストの

引き下げ，償還金の軽減，消費の拡大や国民への理解と協力体制の確立，それに何よりもヘルパー事業を含むしっかりとした酪農基本政策の確立を要求して，それを現実のものとしていかなくてはならない。何とかして，食糧と地球の安全保障と合わせた新農業基本法を作り上げたいと思っている。

今，私は，酪農人が自分の一生を酪農で生きることの基本的考え方を持っているか，いないかということが極めて大切だと思っている。迷いの時にあるからだ。それが酪農の成否を決める重要な分かれ道ではないかとさえ思っている。いわゆる〝酪農哲学〟の有無である。

昨年，7月にヨーロッパ7か国を旅した時に行く先々の酪農家に失礼だったが，このことを聞いてみた。そして，それを総合整理してみると，どうも5つのことに集約されているように思えた。迷える年の初めであるだけに，迷わないで生きぬいていけるために，ここに参考に載せておくことにする。

その**第1**は，健康で働くことができることは人生何にも代えがたい幸福なことである。**第2**，乳牛，酪農，大自然，田舎が好きである。**第3**，酪農には自由がある。一国一城の主として，自分の考えるようにやれることは何にもまして喜ばしいことだ。**第4**，創意工夫して努力すれば，生活もできるし，好きな楽しみもやれる（収入と時間）。**第5**，酪農は人々の命と健康と国土の美化保全を守り育てる誇り高い仕事である。というものである。

この5つが渾然と融合して，〝忙しいが楽しい毎日だ〟と家族ともどもが言い切れるような人生哲学を持っていた。右顧左眄（うこさべん）していないのである。そういう人が幸せなんだ。堂々と我が人生を生きている。最も人間らしい尊い生き方の1つなんだという思いが深くしたものである。

私が1昨年の日本酪青研で，酪農成功5原則ということで話しかけた〝好・勉・基・記・楽〟もまんざら的をはずしたものでないことを知って，ささやかな自信を深めることができた。

迷う時にはベースキャンプに戻って，慌てないでやるべきことをコツコツとやるのが登山で頂上をきわめることの要諦だとされているが，私は，この哲学と6つのハードルがその基地での仕事のように思っている。ともあれ不安を解消して〝明るい展望を拓く〟年にしたいと思う。では，良い年を！

参考までに，好・勉・基・記・楽の5原則を載せておく。

酪農成功5原則（案）

—1989. 11　小林—

1 酪農が㊚きで，よく牛舎にゆく。
—牛と共に，大自然の中に生きるよろこび—

2 助言を聞いて，創意工夫を重ねる。
—天狗にならないで，いつも㊚強—

3 土，草，牛づくりと乳，肉づくりに熱心。
—技術の㊚本を大切に，コストと品質に挑む—

4 ㊚録，診断，設計を繰り返す。
—欠陥を知り，目標を持って，物や金を大切に—

5 健康で明るく，㊚しい家庭をつくる。
—誇りを持って，希望に燃える—

※好・勉・基・記・楽と略称

新刊図書案内
「飼料作物の病害」シリーズの第2弾!!
原色 牧草の病害
西原　夏樹　著
☆申込みは最寄りの営業所へ
⊙A5版　200ページ
⊙頒　価　3,000円
（消費税を含む）
雪印種苗株式会社